

大天守

1 階

(1) 壁と羽目板

天守閣の外壁は、上部は白漆喰、下部は黒漆喰の羽目板が露出している。漆喰壁は雨や雪にさらされると劣化が早く、また上部の構造物の重量で倒壊の危険性があった。そこで、屋根の庇の範囲外にある、風雨にさらされる壁の部分を保護するために、下見張りを追加した。

右の写真は、1950 年代の修理の際に取り外された 2 階の壁の一部。白漆喰の下にある土壁は、木製の格子枠に縄を巻きつけ、泥を塗り重ねたものである。1 階と 2 階の壁は厚さ約 29 センチで、火縄銃の攻撃は通さなかったと思われる。射程圏外となる高層階は、もう少し薄い壁になっている。

写真に写っている薄い壁は、1913 年に完了した保存工事の際に追加されたものだ。

(2) 石落とし

石垣の基礎に張り出した床の開口部は、石落としと呼ばれる防御装置である。天守閣に侵入してきた敵を攻撃するためのものである。石落としとは、文字通り「石を落とす」ことだが、実際には城を守る鉄砲隊の視線を確保するために設けられたと考えられる。

大天守、乾小天守、渡櫓には 11 個の石落としが設けられている。各壁の角と中間に開口部を設け、基礎部分を見渡せるようにした。

(3) 基礎と廊下

床の中央部分は、周囲の廊下より約 50cm 高くなっている。これは、基礎を構成する木製の梁が二重構造になっており、それを隙間から見えるようにするために必要な設計である。

展示品

1 階の廊下には、1950 年代の修理で城内から運び出された様々な物品が展示されている。

天守閣土塀の一部

これは 1950 年代に行われた大天守の修理で、2 階から取り外された土壁の一部である。厚さは約 29cm。縄を巻いた木枠に泥漆喰を塗り重ね、最後に白い石灰漆喰を塗り重ねたものである。

鯨の屋根瓦

鯨は、虎の頭と魚の体を持つ神話上の生き物。鯨の形をした瓦を城の屋根に載せると、火災から守られると信じられていた。かつて大天守の屋根には、この鯨瓦が飾られていた。棟の南端には口を開けた雄の鯨、北端には口を閉じた雌の鯨が置かれていた。

鯨瓦の支柱

天守閣の屋根に鯨瓦を固定するための柱。190cm の柱のうち 80cm 近くが瓦に食い込んでいたことになる。柱には墨書があり、1843 年のものであることがわかる。

土台支柱

この柱は、基礎の地下支持構造を構成していた 16 本のうちの 1 本である。1950 年代の修理の際、土台を掘り起こしたところ、1 本を除いてすべての柱が腐敗し、崩壊していることが判明した。20 世紀に入ってから大天守が傾き始めたのは、腐った土台が千トンもの重さを支えきれなくなったためと思われる。

懸魚

城の破風には、このような木製の装飾品がよく飾られている。中国から伝わったもので、もともとは魚の形をしており、木造建築の多い伝統的な建築では、火災から建物を守ると考えられていた。この下駄は、江戸時代（1603-1867）に日本で流行した蕪をモチーフにしたものである。